

滑稽俳句をつくりましょう③

小林英昭

いよいよ「滑稽俳句をつくりましょう」も三回目で、これが最終回となります。

今号は、③「俳句では使いそうもない言葉をわざわざ選んで使う」です。

なぜか？ 季語ならびに俳句ではおよそ使いそう

もない言葉と季語を掛け合わせるにより化学変化が起こり、滑稽が生ずるからである。滑稽句でない句は、なかなかそうは行かないが、これは滑稽句だからこそ起きる現象なのだと筆者は思っている。

例えば季語として「冷蔵庫」を選んでみよう。角川の歳時記を引くまでもなく、皆様ご承知の夏の季語であります。そこで筆者は頭の中でつらつら思い巡らす。冷蔵庫で滑稽になるテーマはないだろうか。あった。物でいっぱいになった冷蔵庫。おそらく奥の物はなかなか取れないのではなかろうかと思ひ致すのである。入口に物がいっぱいあって欲しいものが取れない→出せない→出れない→刑務所→終身刑、の連想ゲームである。さらに江戸の昔、監獄には「牢名主」と言うやくざの親分の様なのがいたそうな。牢を取り仕切る古参の囚人である。そこで、

冷蔵庫奥にチーズの牢名主 (牢名主)

の一句となるわけだ。「牢名主」などの言葉は俳句ではめったにお目に掛かれな
いでしょう。さらに一句。やってみよう。季語は「黴」である。梅雨時になると
箆笥の裏などにはびこるあれである。再び連想ゲーム。いつのまにやら黴ている
→人の目の届かないところをねらう→箆笥の裏が好き。そこで、

黴ならば裏工作はお手のもの (裏工作)

とあいなるわけです。「裏工作」なんて言葉は、俳
句では絶対とは言わぬまでもめったには出てこない
言葉でしょう。

もう一句やってみよう。季語は「バナナ」。皮を踏むとバランスをくずしてす
ってんころりと転んでしまうあれである。連想ゲームするまでもなく、

召し捕らるバナナの皮の実行犯 (実行犯)

これで、筆者が何を言いたいのか賢明な読者にはお分かりいただいたと思いますが、いかがでしょう。以下、例によって図々しくも勝手に自例句を引用させていただきます。悪しからず。

口内炎患つてゐるほととぎす (口内炎)

ところてん死んでゆくのは順不同 (順不同)

幽霊のバイト顎足代つかぬ (顎足代)

御内儀の姿がみえぬ初鯉 (御内儀)

葉桜や適齢期とは幾つまで (適齢期)

びつしよりと汗かいてゐる供述書 (供述書)

箱庭にガサ入れをする鬼刑事 (鬼刑事)

虫干をして脱皮する加齢臭 (加齢臭)

カッコ内の言葉を見て欲しい。三文字熟語ばかりになってしまいましたが(これは二文字でも四文字でも五文字でもいいのです)、筆者の言う、俳句では出てきそうもない言葉を積極的に使うことにより、ユーモア、そう滑稽が生まれると言う不思議な現象が生ずるのである。読者も一度は気軽にお試しあれ。

さて三回に渡って「滑稽俳句をつくりましょう」と銘うって自説を述べてはきましたが、ご納得いただいたでしょうか。今ごろこんなこと言つてはなんですが、眉に唾をつけられそうな気がしないでもありません。なお自例句を含め季語はすべて「夏」になっていますが、他意はありません。

では、皆さま、さようなら。

[完]